

長江文明への興味

山崎正寿

哲学者梅原猛氏については、学生時代から関心を持ち、学生時代に読んだ著書「仏教の勝利」以来、聖徳太子、柿本人麻呂、アイヌ文化、縄文文明、森の文明など、色々な著作に触れさせていただいている。京都で開かれた東洋医学会総会の特別講演の後、直接お会いして一言二言お話しを伺ったこともある。先生は学問に熱中すると、一緒に連れていた子供のことも忘れてしまうくらいとか聞いている。講演も語り口はやさしくとも熱情溢れる話しぶりである。先生は国際日本文化センターを設立され、日本文化の真の姿を広く世界にアピールされてこられた。西洋の自然と人間を対立させる科学的合理主義よりも、自然と人間の共生を主張する日本ないし東洋思想に、未来の希望をつないでおられるようである。

先生の関心は多岐にわたっているが、その一つに、この何年間は中国の長江文明の解明に力を入れて来られている。先生の門下で国際日本文化センターの安田教授が現在では受け継いでおられるようだが、この長江文明の実体が次第に明らかにされるにつれ、大変興味深い事実が展開されつつある。それによれば、今日までいわゆる中国の歴史は、約四千年前の黄河文明発生から「夏」や「殷」、「周」を経て連綿と続いてきているように云われているが、実はそれよりもっと古い七一八千年前からさらに一万年前にまで遡れる長江文明(揚子江流域)が存在していたことが、揚子江流域で次々と発掘された遺跡から明らかになっている。黄河文明つまり漢民族の歴史は、草原の小麦と牧畜の文明であり、一方の長江文明は、森で営まれる稲作と漁労の文明であるという。安田教授らの説によれば、紀元前四千年頃に気候の大変動があり、黄河領域の漢民族が南下して、圧倒的な青銅器の武器や馬を以て、長江の文明を滅亡させた。滅亡を逃れた民は一部中国の南の地方に移住して今日の苗族のような少数民族として残り、一部は海を渡って日本にも移住してきたというのである。このように長江文明の解明は、東アジアの古代史を塗り替えるだけでなく、世界の文明発祥の地図を塗り替えようとしている。

そのような歴史の変貌に興味は尽きないが、わが東洋医学の歴史にも大きな見方の変更を余儀なくされるようにも思う。特に江戸時代の吉益東洞に代表される古方派の人達は、傷寒論・金匱要略は黄帝内経素問・靈枢の骨格である陰陽五行論とは異なった医学理論の医学と断じた。傷寒・金匱の医学は後漢の長沙太守(揚子江流域)張仲景の著とされている。張仲景その人の実在が不確かとされており、偉大な傷寒論医学がたった一人の天才によって作られたとするのも疑問を生ずる。勝手な推量かも知れないが、古い古い森の文明、従って多くの薬草も知っていたであろう長江文明に伝わる医学が、傷寒論の基盤になったのではなかろうか。それは黄河文明の代表である黄帝の医学、黄帝内経素問・靈枢とは全く異なった医学ではなかったか。黄帝内経を読むと全く湯液治療と接点がない。草原と牧畜の

民は砒鍼による医学、陰陽五行論による医学が行われたのである。後世になるに随って傷寒・金匱の医学と黄帝内経の医学は相見え、互いの垣根を除こうとしたに違いない。李東垣の補中益気湯はそのような背景から生れた名方であり、大げさで勝手な言い分が許されるなら、黄河文明と長江文明の融合の成果とも言えるのではなかろうか。しかし、傷寒論を陰陽五行論で勝手に解釈することは、はっきり間違いである。せつかく江戸の漢方医達が正確な判断を残してくれたにもかかわらずと言いたい。

梅原先生や安田教授達のお考えでは、中国の史記などの歴史書は、長江文明のことなど一切触れず、黄河文明のみを後世に残した。長江流域は三楚などという野蛮な未開な民しか住んでいないとしている。歴史の重大な改竄である。漢方医学でも陰陽五行論が唯一の中国伝統医学の理論であるとする考えは破棄せねばならない。